九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

日本一の大往還豊後街道（大津往還）

服部，英雄
くまもと文学・歴史館 ： 館長

https://hdl.handle.net/2324/4372004

出版情報：文化財情報. 276, pp.7-9, 2021-03. 熊本県文化財保護協会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

日本一の大往還　豊後街道（大津往還）

くまもと文学・歴史館館長　**服部　英雄**

熊本県立図書館「上妻博之撮影ガラス乾板」
D47-1“熊本市老樹名木誌用”　熊本・一里木　T12.3.27

熊本県立図書館「上妻博之撮影ガラス乾板」
D47-2“熊本市老樹名木誌用”　熊本・一里木　S2.4.22

熊本県立図書館「上妻博之撮影ガラス乾板」
C29-1“菊池郡 大津 陣内老樹名木誌用 社會教育課”
菊陽・三里木の大津馬場　T13.8.4

「熊本より大津まで五里の間、並木の大杉両側に続き、最も大往還なり、並木より並木までの広さ、又大路の広き事、天下の大街道たりども此海道に及ぶ所なし、日本一の大往還歟」

豊後街道は「日本一の大往還」―― このように記述した人物が江戸時代にいた。「名所名物東肥名寄」（文久元年・1861年）の著者松本恒正である。そのあとがきによれば、恒正は江戸滞在の経験のある肥後人で、各地の見聞を踏まえた上での発言であった（丸山伸治「「東肥名寄」所載の「肥の後州名所名物数望附」」本誌274）。

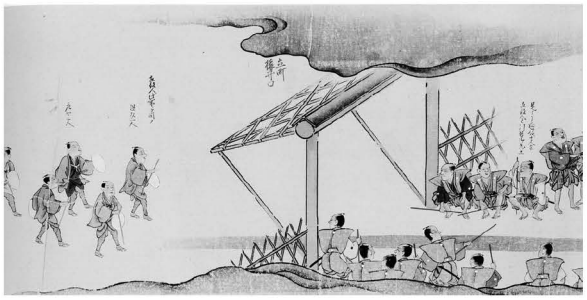
わたしは若い頃に文化庁文化財保護部記念物課に勤務した。ある時先輩が、「熊本の豊後街道は杉並木の中に鉄道も国道も走っている」といった。なんというすごい道か、と思った。やがてじぶんも歴史の道の調査・整備を担当することになった。阿蘇外輪山・滝室坂の藪をこいで旧道をさがしたりもしたし、のちには豊後街道の整備に従事もした。

熊本城三の丸・新一丁目御門外に、勢溜の広場があって、多数の人が通行する場だから、高札場があった。よってそこは札の辻と呼ばれていた。肥後から他国へ通ずる道、すなわち豊後街道・豊前街道、薩摩街道・日向街道はここ札の辻が起点だった。近代には道路元標も置かれている。豊後街道・豊前街道は京町の追分までは同じ道で、札の辻より法華坂を上がり、そこから城内二の丸を通行し、学校＝時習館をまぢかに見ながら新堀御門をでた。

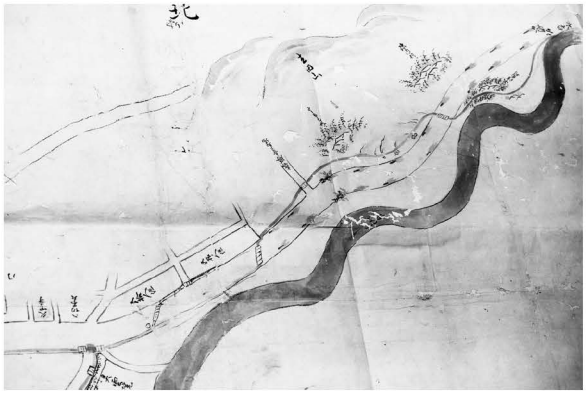
参勤交代で熊本に初入国した細川韶邦御国入りの行列図（大分市鶴崎剣八幡宮所蔵）に、立町（＝建町）構井口の絵がある。ここまでは領内を進む行列を、組頭・庄屋・小頭ら村役人が案内し先導してきたが、ここで廻り役に引き継ぎ、まずは下級藩士が沿道で出迎えた。立町構井口は須戸口または押口とも呼ばれており、大型の簀戸（すなわち須戸、木ないし竹だけで組んだ、大きな隙間のある木戸）が建町入り口にあった（簀戸、簀戸門については『日本建築語彙』『日本国語大辞典』）。

くまもと文学・歴史館では本年度の秋に、「絵図が語るくまもと」展を開催した。その中には大津往還＝豊後街道が描かれた絵図がいくつもあった。

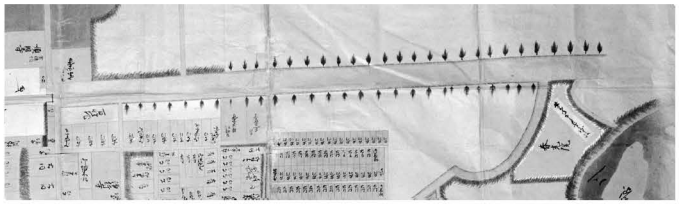
熊本県文化財保護協会：機関誌「文化財情報No.276（2021年3月号）」に掲載



細川韶邦（よしくに）公初入部御行列画図
（大分市鶴崎剣八幡宮所蔵）
在役人此所ニテ開ク　組頭二人庄や　立町構井口
小頭四人是ヨリ廻役十人余在役人と引替御先ニ立



熊本県立図書館『水道の絵図〔古地図〕』
請求番号：チェ/023　資料番号：0119377968



熊本県立図書館『手取・千反畑・立田口・向寺原・建部の絵図〔古地図〕
（手取外坪井絵図向寺原竹部共ニ）』
請求番号：チェ/125 資料番号：0119367480　右が白川

出発点の札の辻一帯を描いた熊本城図はいくつもあった。また立町構井口・立田口周辺の豊後街道（大津往還）を描いた図も数点あった。

そのひとつが「水道の図」だった（宝永元・1704～同四・1707年制作、『新熊本市史』絵図地図編19）。水道町の語源となった白川（水呑）から引水する水道の絵図である。開架水道が、熊本城下、水道口より子飼、手取を経て坪井川に落ちるまで、流れていた。長崎県・島原城下を流れる水道に同じような景観があっただろう。道路が交差するところには蓋をしているなど、詳細な様子が描かれていた。興味深い地図だから、私たち職員も水道描写の追求に関心があって、当初は気づかなかったけれど、豊後街道の泰勝寺馬場近くに大きな木が一対描かれていた。豊後街道に関心を寄せていたからこそ、一里木だと思いついた。先の札の辻からここまでが一里であった（通常、一里は三十六町だが、最初の一里だけは四十町だった）。またその周辺にあたかもロウソクのような形のものが連続して描かれていた。それが杉並木だとは、すぐにはわからなかった。

黒髪宇留毛村、一里木に関しては、くまもと文学・歴史館に上妻博之氏撮影になる上妻文庫古写真があって、道の両側にそびえる大正昭和期の豪壮な一里木の榎二本が写っていた。旅人ははるか彼方からでもこの一里木を遠望できたから、次の目的地を視認しつつ歩いたことになる。そしてまた次なる二里木を目標にできた。一里は歩行時間の目安である。一里を半時（１時間）で歩き、休む。多くの旅人が、ここで休んだ。一里木の民家には「塩」という看板、あるいは日の丸がある。休憩する人に提供する菓子・団子などを売る店があったらしい。また写真には馬、大八車ならびに車輪が多く写っている。当時の物資運搬の主力が馬と車であったこと、おそらくここで馬を交換したことが推測できる。

どのように一里という距離を測ったのかはわからないが、歩測であろう。里数木、一里木は枯死したが、二里木は衰えながらも住民の保護活動で現存する。三里木は枯死した。

杉並木は、現在は三里木周辺に壮観な様がみられる。熊本空港着陸前には空から視認できる。いま熊本市街には見られないはずだが、水道図では泰勝寺馬場の近くから始まっていた。熊大前の道にも杉が植っていたようだ。水道が機能していた時代、江戸時代末期までの存続は確実である（古写真には杉かもしれない木が写っているが、断定はできない）。

ところが他にも杉並木を描いた絵図がある。それらのかなりは城下近くにまで杉並木が続いていたとしているけれど、なかには同じ場所なのに杉を全く描かないものもあった。

大津往還を含む地域を描いた絵図を『新熊本市史』絵図地図編から並木の有無でＡからＤに分類し、それを年代順に並べてみた（『市史』は多数の絵図から代表的なものを選別しており、県立図書館には同じ地域を描いた多数の絵図がある）。似た構図が多いが、時代を異にする。Ａは建町須戸の手前まで杉があるもの、Ｂ以降はそれが短くなり、Ｃは一部分、子飼分岐まで、Ｄは杉並木がなくなっているもの、である。

Ａ－１『市史』39－１「手取　千反畑　外坪井　向寺原　竹部之絵図」（推定明暦元・1655～寛文二・1662年の制作）
Ａ－２『市史』40－１「手取　外坪井絵図　向寺原　竹部共ニ」（推定寛文四・1664～同七・1667年）
Ａ－３『市史』41－１「手取　外坪井之絵図」（１延宝六・1678～同七・1679）
Ｂ『市史』19、「水道の図」（宝永元・1704～同四・1707年、「市史」19）
Ｃ－１『市史』未収録「外坪井　千反畑絵図」（宝永前後・1704前後＊『市史』には同じ題、構図の44（宝暦元～四・1751）が収録されるが（Ｄ－２）、そこに並木は描かれていない
Ｃ－２『市史』47、「立田口絵図」（推定宝暦十・1760～安永二年・1773）
Ｃ－３『市史』68－６－１熊本所分絵図　向寺原　建部之絵図（安政四・1857年以降）
Ｄ－１『市史』44（宝暦元～四・1751）、上記Ｃ－１に同じ構図、
Ｄ－２『市史』45建町構ヨリ荘厳寺迄（文化元・1804年以降）

製作年代が古いものほど並木が長いことがわかる。17世紀後半には、城下との境、立町（建町）の簀戸口近くまで杉が植っていた。さぞかし壮観であろう。よく見ると変化があり、Ａ－１では、のちに桝形が作られ、養徳寺が建立される四つ角（当時は畠で桝形もない）までは杉が密集するが、その西側はまばらになる。杉が植っていたことは確実で、仮名で「すき」、土手に「きし」と注記されている。北側は四つ角西の畠地までは杉があるが、その先はない。Ａ－２は均等の密度で、Ａ－１の長さの範囲に杉がある。Ａ－３では並木は続くが、相当にまばらである。ただし北側に空地とされた土地は、上記絵図になかった杉が一本だけ描かれている。次第に歯抜けになり、後退していった。Ｃより古いＢ（水道図）の方が杉並木は短い。Ｃでは子飼分岐までは杉がある。城下町が拡大し、次第に人家が密集するようになる。杉枝が張れば日当たりは悪くなるし、枯損した枝が大風で落下したりして、じゃまものに見られだした。

＊ただし藩作成の絵図は、前にあったものを踏襲し、書き換えることもあり、実写とは限らず、時代と描写が前後することもある。

大津往還＝豊後街道を歩く。一里ごとに樹勢の盛んな榎があって、道には杉並木が延々とつづく。旅人の支えになった美しい道。「日本一の大往還」とされた由縁であって、大いに共鳴する。この道がこれからも長く愛され続けることを願う。